

或るとき突然
宇野千代

宇野千代

或るとき突然

中央公論社

或るとき突然 定価一三〇〇円

昭和五十六年十月二十日 初版印刷
昭和五十六年十月三十日 初版発行

著 者 宇野千代

発行者 高梨 茂

印刷所 三陽社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二―三四

©一九八一 検印廃止

目次

何事も起らなかつた

五

それは奇遇か

二五

或るとき突然

四三

これも何かの種蒔きか

五七

和ちゃんの話

五五

仰ぎ見る野上先生

六七

初荷の馬

七九

歌だけで生きてゐる

一〇三

暮しの中の私

一〇七

私の文章作法

一三三

私の発明料理

一五九

あとがき

二五五

或るとき突然

何事も起らなかった

車窓から見ると、どここの桜の花ももう満開を過ぎてゐる。私の故郷である岩国の桜を見せるために、あと三日たつてから、客を呼ぶ手筈であるが、それまでに、花がもつかどうかは気にかかる。散り際の桜もきれいだらう、と思つて見る。岩国と言ふところは、地方の小都市であるが、そこに咲いた桜を、特別に美しいと思ふのは、單なる私の蟲眞目か、或ひは多少の客観性のある見方か分らないが、それでも岩国へ客を呼ぶと言ふのは愉快的な気がする。しかし、今度の客は、私の経営してゐるきものの会社の職先きの人たちばかりで、どの人もみな、岩国の桜も見たいが、私の生れた家も見たい、と言ふ氣持なのである。

それにしても、あの家の中に、総勢十八人の人たちが泊れるものかどうか、と思

ふと、途方に暮れる。途方に暮れながら、ええい、と思つて、無理に呼んで了ふのが、いつもの私のやり方である。「うちの庭には桜はないが、紅葉の木ばかり百本くらゐ植わつてるのよ。ちやうどその芽が、庭一ぱいに吹いてる頃だと思ふから、それも見て貰ひたいのよ。」と私は説明する。説明してゐる中に、その庭の様子がまさまざと見えて来る。紅葉ばかりが百本も植わつてゐると言ふのが、私には自慢である。桜見物ではなく、この紅葉を見せるのが目的で、客を呼んだのかも知れない、と思つたりする。

新幹線の駅から十五分で、わが家へ着く。裏口から庭に這入ると、おや、紅葉の庭と思つてゐたのはこれか、とがっかりする。あとで聞くと、今年の冬はとても寒かつたので、芽を吹くのがこんなに遅れたのだと言ふことであるが、どの樹も、枝のさきに芥子粒ほどの芽が出てゐるばかりなので、これではまるで冬景色と同じではないかと、がっかりする。ただ、一面に蒼い苔が庭中をおほつてゐるのだけはどうもきれいで、助かる。「先生は何でも、さきに自慢なさるのだから、」と一緒に来

たうちのものたちが私を笑ふ。

家へ這入るとひんやりしてゐる。この前、十一月に来て今日まで、誰も来ないのだから、家中が湿つぱいのは当り前である。縁側の雨戸をあける。一せいに陽が這入る。庭は淋しいが、しよげてはゐられない。大急ぎで、押入その他をあけて蒲団の数を調べる。毛布も枕も足りない。それでもあれこれと、それらのものを客の数に合はせるやうに、あくせくするのが、私には可厭^いではない。張合ひがある。

客が着くのは、三日後の三時過ぎである。その時間までに風呂が沸いてゐて、注文してある料理が間に合ふかどうか、念を押したりする。その料理も自慢である。この町から二、三里離れた、平生と言ふ瀬戸内海沿ひの漁村から運んで来る、新しいピチピチの魚料理だからである。

こんな風に、客の着く二、三日前から何から何まで用意周到に準備をしておくのが、私の癖であるが、しかし、こんな風にあくせくされ、用意される客の方の心持はどうか、それを考へるのは忘れてゐる。用意周到にされればされるほど、重苦し

い気持が、ちらとするのではないかと言ふことを忘れてゐる。

これは私の若い娘の頃からの習慣だと言ふことに、ふと気がつく。私は好きな人が出来ると、その人が喜びさうなと思はれることを、或ひは喜びさうだと自分がつたことを、あれかこれかと雨の降るやうに、矢継ぎ早やにして了ふ癖がある。それは、その人のためにするやうに見えて、ほんたうは、さうするのが自分で愉しいからである。

私は有頂天になつて、次ぎから次ぎへとさうする。ひよつとしたらその人は、「もう止めてくれ。お前の親切な気持は分つたから、止めてくれ。」とさう思つてゐるのではないか、とは思はない。そのことは加速度になつて続く。或るとき、その人は私のところからどこかへ行つて了ふ。あの痛烈な、悲運な経験は、いまの私の年齢の、八十三歳の齡になつても、まだ止まない。人を待つと言ふことは、凡そ愚かなことだとは思はない。

しかし、さう言ふ反省は、私の心の中をちらと通り過ぎるだけで、また、あくせ

くと支度をする。支度をすることの方へ心がとられる。この町の市場は小さな市場であるが、新しいものが何でもある。この季節のものが何でも揃つてゐる。筍、なまこ、めばるなどは東京にゐたときから私の狙つてゐたものである。うちのものたちと一緒になつて、買ひ物に狂奔する。それから、ちよつと一と片かた、ついたとき、私たちはほつとしてそのまま縁側に列んで休む。見ると、庭の向うに、同じ形の新しい家が二軒列んで建つてゐる。和洋折衷の、それほどには見劣りのしない家である。この頃は田舎の家も、この和洋折衷の形が多い。

「千代さま、お戻りんされませえ。」と言つて、近所のをばさんが裏口から這入つて来た。血統きではないが、遠い縁続きの人の一人である。お戻りんされませえ、と言ふのは、お帰りなさいませえ、と言ふほどの意味である。この町の人、何ヶ月振りに私に出会つても、決して、いらつしやいませえ、とは言はず、お帰りなさいませえ、と言ふ。私のことを、いまでもこの町に住みついてゐる人間のやうに言ふのである。「いらんことを言ふやうぢやが、ちよいと見てお見んされえ、」と言つて

をばさんは、私を庭の一番はしの方までつれて行く。「ここを見てお見んされえ。こここの土地は、あの家のものではなうて、おうちのものぢやと思ふのぢやがの、」と言つて、をばさんは、庭の向うの、あの二軒の和洋折衷の家の方を指さす。おや、いま、この家の建つてゐることに気がついて、見たばかりであつたのに、と私は思ふ。

をばさんの言ふのは簡単であつた。いらんことを言ふやうぢやが、と言ふ前置は、よけいなことを言ふやうであるが、と言ふ意味である。をばさんが私に注意したのは、うちの地面と、この新しく建つた二軒の和洋折衷の家との地面の地境が、以前ははつきりとしてゐたのに、いまでは紛らはしくなつてゐる、と言ふことであつた。この二つの地面は、昔は何れもわが家の所有であつた。いま残つてゐるうちの地面と、和洋折衷の家が二軒建つてゐる隣家の地面とは地続きではあるが、うちの地面の方は石垣が六、七尺も高く築いてあつて、向うの地面はうちよりも六、七尺も低い竹藪であつた。その間に確然と石垣が築いてあつたので、そのままであれば、

地境がどうかうのと紛らはしく思はれるやうな心配は全くなかつた。

しかし、この低い地面の竹藪の方を、或るとき、わが家の暮しが火の車のやうになつたとき、いまの持主に売り渡して了つたのであつた。売り渡したのではあつたけれども、石垣によつて高い土地と低い土地とに確然と別れてゐたので、両者の間にいざこざが起らうなどは、そのときは誰も思はなかつた。その中に、下の竹藪が取り払はれ、畑にでもなつたやうであつたが、依然として高い土地と低い土地とに別れてゐたので、地境のことで、いざこざするなどは、誰も思つてはゐなかつた。

あれは六、七年も前のことであるが、私はわが家の落ちこぼれた古家を修復した序でに、うちの地面と、もとの竹藪のあつた低い地面との地境に、板塀を遶らした。その板塀は地境とすれすれの端の方ではなく、うちの方の土地の、高く築いてあつた石垣から、一尺か一尺五寸くらゐの内側にして、たとへ板塀を遶らしても、その外を人が歩いて通れるくらゐの余地を残しておいた。

ところが、或るとき隣家では、低い土地の竹藪をとつぱらつたあとに、殆んどわが家の地面と同じ高さに高く盛り土をして、その上に、あの二軒の和洋折衷の家を建てたのである。うちの庭の向うは、遠い向うの土堤の方まで、遙かに眺望がきいてゐたのに、或るとき、によきつと、すぐ眼の前に、二軒の家が立ち塞がつたのを見たのである。それでも私たちは、「あ、家が建つた。」と思つただけで気にもとめなかつたのに、それがさうではなかつた。をばさんの話によると、私たちが古家を修復したとき、その地境に立てた板塀の外側に、人が歩けるほどの余地を残しておいた、その狭い余地の上に、いまでは殆んど水平になるほど新しく盛り土をした隣家の人が、小さい木を列べて植ゑてゐる、と言ふのであつた。

なるほど。これは紛らほしいことになつたな、と私も思つた。盛り土をしたせいで、いまでは隣家の土地と水平の土地になつたのであるから、隣家の人は、こも自分の土地だと思つて、私がわざわざ、人が歩けるくらゐに残しておいた狭い余地の上に、小さい木を列べて植ゑたとしても、この間違ひはあり得べきことである。